

The Failure of Romanus III Argyrus

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00000138

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



ロマノス三世アルギュロスの蹉跌

——十一世紀前半のビザンツ皇帝権と政治体制——

根津由喜夫

【要約】一〇二五年、バシレイオス二世没時のビザンツ帝国は繁栄の絶頂にあるように思われた。だがその一方で、従来の膨張主義的な対外政策は限界に達しようとしており、国内でも、貴族勢力の台頭に伴う社会の変質が進行していた。本稿の課題は、この時期にビザンツの帝位を占めたロマノス三世アルギュロスの行動の軌跡を追うことで、こうした過渡的時代のビザンツ皇帝権のあり方を考察することにある。とりわけここでは、皇帝が敢行した軍事遠征に焦点を当て、それが彼の政権強化策のなかで占めた重要性を解明したいと思っている。そこで、我々は、彼が皇帝に登位するに至る経緯と、彼の政権の主要構成員の特徴を明らかにすることで、ロマノスが大遠征に乗り出した動因を検証し、さらに、遠征の前後に発生した陰謀事件の分析を通じて、この軍事行動の失敗が彼の権威の失墜を必然たらしめたことを理解することになるのである。

史林 七四巻二号 一九九一年三月

一 はじめに

ロマノス三世アルギュロス(在位一〇二八—一〇三四)というビザンツ皇帝の名は、おそらく多くの人々には馴染みのないものだろう。無理もない。およそ一千年以上にも及ぶ帝国の歴史のなかで帝位を占めた歴代ビザンツ皇帝のなかでも、彼は最も影の薄い部類に属しているのだから。そこで、手近な通史の叙述をたよりに、彼の短い治世を復元しておこう。^①

彼が、マケドニア朝最後の男系正嫡コンスタンティノス八世(在位一〇二五—一〇二八)の後継者に指名され、後者の娘ゾエと結婚して、当時、巨大な版図を誇った帝国の頂点に立ったのは、既に老境にさしかかった頃のことだった。彼が古い貴族家系の出自であること、即位するまで首都長官^{ユルトルゴス・パレオス}という高級文官職にあったことから、彼はしばしば、帝都の元老院を根城とする「文官派」貴族の代表者と目されている。^②けれども、彼は統治者としての資質には欠けていたらしく、内政では自らもその一員である貴族勢力の土地集積の動きを容認して小土地自由農の没落を傍観、対外的には不要かつ無謀なシリア遠征を敢行して、逆に大敗を喫する有様だった。結局、彼は皇后ゾエとその若い愛人(後のミカエル四世)の手にかかって無惨な最期を遂げるのである。

若き日に同帝に接したというミカエル・プセルロスは、ロマノス帝をある種の誇大妄想家として描き出している。

「彼は実際に知っていることの何倍も知っているつもりだった。そして、いにしえの名高いアントニウス朝諸帝、もっとも思慮深きマルクス(「アウレリウス」)やアウグストゥスに彼自身の統治を倣わせようとした。」^③

かと思えば、彼は「戦勝の栄光に心を奪われ」、「かのトラヤヌスやハドリアヌス、さらに遡ってアウグストゥスやカエサル、そうした人々に先行するフィリポスの子アレクサンドロスについて知られている名声」に劣らぬ軍功を獲得することを熱望し、その一方で、「非常に有名な神殿を建設したことであのソロモンを妬み、神聖なる叡智^{ソフィヤ}にちなんで名付けられた巨大な教会のゆえにユスティニアヌス帝を羨んで」、聖母教会の造営事業に取りかかったのである。^④

だが、こうしたロマノス帝の移り気で夢想的な行動を、単に彼個人の性格や気質に帰すだけではこの本質を見落してしまうことになるのではなからうか。何よりも、彼の一見、突飛な行動も、当時の歴史的状況のなかに位置付けなければ、その意味するところを完全に理解することは不可能であろう。

先にも触れたが、彼の即位当時、ビザンツ帝国は東地中海に覇を唱える大国だった。ドナウ川からユーフラテス川の岸辺まで、南イタリアから北シリアに及ぶ広大な領土。しかし、目ざましい勢いで進められてきた征服事業もピークに達しようとしており、さらに膨張策を続けるか、あるいは平和路線に転じるか、思案すべきときが訪れていた。また、目を国内に転じれば、繁栄の影で深刻な社会問題が進行中だったことも見逃すことはできない。高級軍人として戦勝の果実を享

受した貴族勢力が、小土地自由農の犠牲の上に、大規模な土地集積を推し進めていたのだ。

こうした内外の複雑な情勢のなかでロマノス帝の行動を眺めなおしてみると、むしろ、そこに浮かび上がってくるのは、時代の求める君主像を演じようと必死でもがく彼の姿なのではあるまいか。マケドニア朝の皇統をひくゾエの配偶者であること以外、皇帝として何の正統性も持たぬ彼が、長くその地位に留まるためには、時代の趨勢を素早く掴みとり、人々の期待する皇帝の姿を演じ続けるほかに、いかなる術があったらうか。

彼が演じた最大の政治的パフォーマンスを挙げるとすれば、一〇三〇年のシリア遠征において他にあるまい。後述のごとく、この事件は、当時の対外情勢からよりも、国内の政治力学の視角から考察した方が、はるかに解釈が容易なのである。

もちろん、派手な演技の裏では、政権基盤安定のための地道な努力が進められていたことも忘れてはならない。とりわけ、政治的発言力を増していた貴族勢力をいかに処遇するかは、政権の命運を左右する最大のポイントであった。ここでも、ロマノス帝は、バシレイオス二世帝(在位九七六—一〇二五)以来の貴族抑圧策の在廃をめぐって決断を迫られていたのである。

これまで、ロマノス三世を単独で論じた研究は皆無と言ってもよい。貴族家門としてのアルギュロス家の歴代成員を追跡したJ・F・ヴァニエの研究^①、バシレイオス二世から十一世紀半ばまでの歴代皇帝政権の構成員を詳細に論じたS・A・ケマーの学位論文に、同帝に関する程度まとまった記述が見い出せるくらいである。^②だが、これら二つのプロングラフィー研究^③は、これから我々が考察を進めていく際に、貴重な方法論上の指針を与えてくれた。すなわち、ヴァニエによって、ロマノスに皇帝の座を与えるに至るまでのアルギュロス家の活動の軌跡が歴史的に解明されたのであり、ケマーによって、同帝の政権の構成員が、彼の前後の政権のそれと対比して、いかなる特徴を示したかが、具体的に明らかにされたのである。

そこで本稿では、これらの研究の成果を発展的に継承しつつ、以下のような順序で議論を進めていくことにしたい。

まず第一に、ロマノス帝即位の歴史的前提を成すアルギュロス家興隆の軌跡を、同時代の政治・軍事情勢の脈絡のなかで跡付けていく。そのうえで、彼の治世に直接、先行するコンスタンティノス八世の政権の構成員と同帝の政策を、ロマノス三世のそれと対比させるために、詳しく論じることにしたい。

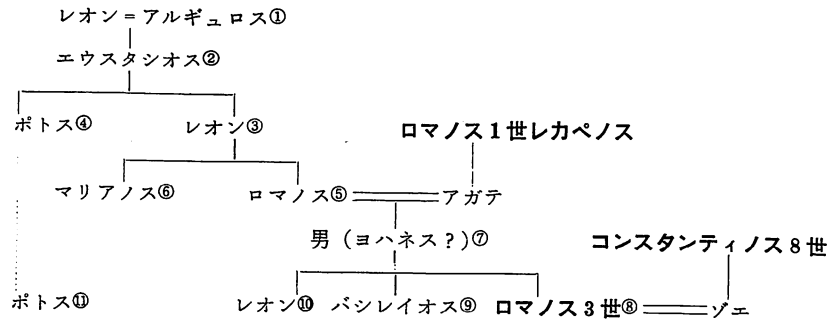
次いで、ロマノスが皇帝に選ばれるに至った経緯と、彼の政権の支持者たちの構成を、当時の帝国支配層内部の派閥力学の観点から、考究する。ここでは、ケマーの議論を出発点に、さらにそれを深く掘り下げ、筆者独自の見解を提示するつもりである。

そして、以上のような作業を経たうえで、ロマノス三世が決行したシリア遠征の経過を分析してみれば、それが皇帝の統治プラン上で占めた重要性や、当時、皇帝が軍事行動に直接関与することの意義が改めて浮きぼりにできるのではなからうか。そうした考察の末に、我々は初めて、この皇帝の行動に歴史的評価を下すことができるのである。

結果として、彼のこの遠大な計画は失敗に終わった。そして、それが彼の失脚をも運命付けたのである。そのことは、遠征前後に起こった一連の陰謀事件の分析からも明らかにされるであろう。この点で、本稿のタイトルにある「蹉跌」には二重の意味が込められていることをお含みおき願いたい。

- ① cf. G. Ostrogorsky, *Geschichte des byzantinischen Staates*, 3 Aufl., München, 1963, S. 265-268.
- ② *ibid.*, S. 266.
- ③ Michael Psellus, *Chronographia*, ed. E. Renauld, 2 tomes, Paris, 1926-1928, I, p. 33.
- ④ *ibid.*, I, p. 35.
- ⑤ *ibid.*, I, p. 41.
- ⑥ J.-F. Vannier, *Familles byzantines: les Argyroi (IX^e-XII^e siècles)*, Paris, 1975, p. 103-104.
- ⑦ S. A. Kemer, *Emperors and Aristocrats in Byzantium, 976-1081*, Ph. D. thesis, Harvard University, 1983, pp. 174-189.
- ⑧ 他 J. S. Stavrakas, *The Byzantine Provincial Elite: A Study in Social Relationships during the Ninth and Tenth Centuries*, Ph. D. thesis, The University of Chicago, 1978, pp. 46-53. アルギュロス家のプロングラフィーが取められているが、その大半はヴァニエの説を踏襲している。

アルギュロス家系図 (1)



註) 人名の太字は皇帝

小アジアで皇帝に宣言されたニケフォロス・フォーカスの対抗馬に推され、後者の首都入城を阻止しようとして、市街戦のなかで悲業の最期を遂げてしまふ。⑩

ニケフォロス二世フォーカス(在位九六三—九六九)とそれに続くヨハネス一世ツィミスケス(在位九六九—九七六)の下では、フォーカスの権力奪取に抵抗したアルギュロス家の人々は歴史の後景に退くことを余儀なくされた。この時期、ビザンツ帝国は大幅に征服事業を進展させているが、アルギュロス家の成員がそこで積極的な役割を演じた形跡を見つけ出すことはできない。今日残されている断片的な手がかりから推察する限りでは、同家はこの間に、首都の文官・宮廷貴族家門へと性格を変えつつあったようだ。S・スタヴラカスがロマノス三世の父⑦ではないか、と推測しているヨハネス・アルギュロスなる人物の印章には、皇宮の儀仗兵を意味するエピ・トゥ・クリュントリクリヌウという官職名が残されていた。⑩ 高級文官として官職階梯をたどるロマノス三世の前半世は、まさにこうした路線の延長線上に捉えられるのであろう。

アルギュロス家が再び日の当たる場所に姿を見せるのは、マケドニア朝の正嫡バシレイオス二世が国家の最高権力を回復した後のことだ。父帝ロマノス二世を亡くして不安な幼い日々、都に迫るニケフォロス・フォーカスの軍勢に立ちだかつて死んだマリアノス・アルギュロスの思い出を、皇帝が心の片隅に留めていたとしても不思議ではない。成人に達し、小アジア貴族勢力の反抗を退けて国政の実権を手中にしたバシレイオス二世は、アルギュロス家の成員を

二 ロマノス登極の歴史的前提

ビザンツ軍が東方戦線で攻勢に転じようとする九世紀半ば、最初のアルギュロスが歴史の舞台に登場する。その名は、レオン・アルギュロス(系図一の①)、その官職はトゥルマルケス、つまりテマの副司令官であった。本来、「銀」を意味するアルギュロスという姓が彼に付された理由については、史書は、「彼の身体の清潔さ、清らかさのためか、あるいはその容貌の美しさ、高貴さのためか、あるいは彼の出自や勇らしさの何らかの所作のためか……」①と語って、明確な説明を加えてはいない。だが少なくともそこに、この姓の持ち主への賞讃の念を読みとることは可能だろう。彼は、「ミカエル〔三世、在位八四二—八六七〕帝の下で彼に比肩する軍人はいない」と称えられた高名な武人だったのである。彼の息子エウスタシオス②も、「その名を挙げただけでアガレノイ〔イスラム勢力と同盟したパウロ派の人々〕は恐慌をきたして逃げだした」と伝えられるほどの勇猛な將軍であった。④ 軍事的緊張の続く小アジア辺境のカルシアノンに本拠を定め、私的武装集団たる従者^{アンドロガイ}を擁するレオン・アルギュロスの姿は、この時期に簇生しつつあった小アジア軍事貴族のひとつの典型と言えよう。⑥

その後、エウスタシオスの息子の世代に、アルギュロス家は中央政界への進出を果たす。小アジア軍事貴族の一方の雄レオン・フォーカスとの政争に勝利して帝位に昇ったロマノス一世レカペノス(在位九二〇—九四四)は、自己の政権の軍事的支柱としての役割をクルクアス・アルギュロス両家に求めた。この結果、アルギュロス家のレオン③とポトス④の兄弟は、九二二年頃、相前後して最高軍司令官職であるドメスティコス・トーン・スコローンに就任し、あわせて前者の息子ロマノス⑤がレカペノスの娘アガテと結婚して、両家門間の提携強化が図られた。⑧

これに続くコンスタンティノス七世(単独統治期は九四四—九五九)とロマノス二世(在位九五九—九六三)治下には、レオン・アルギュロスのもう一人の息子マリアノス⑥が南イタリヤにおける反乱鎮定やバルカン方面での対マジヤール戦などに幾多の勲功をあげている。⑩ ところが、九六三年のロマノス二世の死に伴う政情不安のなか、西方の軍勢を掌握する彼は、

厚く遇した。ロマノス三世の父は、パトリキオス位に進んでいる。^⑧ロマノス^⑧自身はほぼ一貫して司法関係の職歴を歩み、クワエストール職を皮切りに、ヒッポドローム法廷判事、大教会主計官を経て、皇帝に推挙される一〇二八年には首都長官に在任していた。^⑨一方、彼の兄弟バシレイオス^⑨は、武人としてのアルギュロス家の形質を継承していたらしい。一〇一〇年、当時サモスのストラテীগロス職にあった彼は、イタリア長官に任じられ、おりから彼の地で勃発していた反乱の鎮定を命じられた。かつてマリアノスが活躍した南イタリアの地に再びアルギュロス家の成員が軍を率いて上陸する。バシレイオスは、反乱の中心であったバリの町を攻囲し、激戦の末にこれを陥落させた。^⑩その後、一〇一六年末ないし一七年初頭、彼は、新設されたヴァスプラカンのストラテীগロスに転じるが、ここでは住民の掌握に失敗し、ニケフォロス・コムネノスと交代させられている。^⑪

なお、時間は前後するが、一〇〇五年ないし六年に、彼らの姉妹マリアがヴェネツィア元首ピエトロ二世オルセオロの息子ジョヴァンニに興入れたこと（後掲、系図二を参照）、また、バシレイオスに従って南イタリアへ渡った彼らの末弟レオン^⑫が同地で戦死を遂げていること、はイタリアの地とアルギュロス家の深い縁を物語るものと言えよう。

以上のアルギュロス家の歴史を閲覧するとき、我々は、マリアノス＝アルギュロスの時代が同家の歴史の転換点を成し、彼の行動によってその後の同家の進路が方向付けられたことに気付く。それまで、東方戦線での軍功を足がかりに発展してきたアルギュロス家は、イタリア方面司令長官などを歴任した彼を画期として、武人として国家に奉仕する場合には、バルカン・西方属州を主たる活動の場とするようになった。さらに、彼がニケフォロス・フォーカスの帝都入城に敵対して敗死した結果、彼の一族は重要な軍事官職から遠ざけられ、首都の文官・宮廷貴族への転進を迫られることになる（その素地は、マリアノスの兄弟ロマノスが、レカベノス帝の娘と結婚して宮廷に迎えられたときに既にできていたのかもしれない）。ロマノスとバシレイオスの兄弟の世代にアルギュロス家が復権を果したとき、前者が首都の高級官僚、後者がエーゲ海やイタリアで奮戦した軍人という、およそ対照的な姿で登場するのも、各々がこうした二つの路線を継承したものと考えるならば、得心がいくだろう。^⑬

バシレイオス二世帝が旧来の大貴族を容赦なく弾圧する一方で、多くの新興家門を登用したことはケマーの指摘する通りであるが、それらのなかで、アルギュロス家は、何世代にも遡る古い伝統をもちながら、同帝の下で重用されたという点で、一際、異彩を放つ存在だったのである。

一〇二五年、バシレイオス二世が没すると、半世紀の間共治帝として彼に従ってきた弟のコンスタンティノス八世が正帝の座に就いた。強烈な個性をもった兄と比べると、彼の存在感の乏しさは否定しようがない。だが、少なくとも貴族勢力に対する彼の態度は、兄帝以上に強硬なものだった。

史書は口をそろえて、コンスタンティノス八世が重要な国家官職を自己の腹心である宦官たちで固めたことを強調している。^⑭スキュリツェスの叙述に従って、重職に就いた宦官の名を列挙してみよう。

まず、皇帝の側近中、筆頭の地位を占めたニコラオスは、パラコイモメノス兼ドメステイコス・トーン・スコローンとして文字通り文武の最高権力を一手に掌握した。これに次ぐニケフォロスは、プロトヴェステイアリオスとして宮廷に重きを置き、さらにシュメオンがドロンガリオス・テース・ヴィグラス（皇宮警備長官）、エウストラテイオスがメガス・ヘタイレイアルケス（近衛軍司令官）に各々任じられて宮廷を守る軍事力の掌握が図られた。宦官の勢力が及んだのは宮廷周辺に限らない。東部国境の要衝であるアンティオキアとイベリアの地方長官には、各々、スポンデュレスとピンディア出身のニケタスが派遣されたのである。^⑮

これらの人事のなかでも、宦官ニコラオスがドメステイコス・トーン・スコローンに任命されたことは、この官職には従来、宦官は就任できぬことが不文律だっただけに、世間を驚愕させるものだったに違いない。^⑯だが、見方を変えれば、あえてタブーを破ってまでも、自己の腹心で権力を独占しようとする皇帝の強い信念の表出を、そこに感じとることも

きるだろう。

こうした、側近の宦官たちへの権力集中と平行して、皇帝は兄バシレイオス二世が育てた新興貴族層から次々と重要な官職を取り上げていった。たとえば、前述したアンテイオキアとイベリアの地方長官職は、コンスタンティノス・ダラッセノスとその弟ロマノスに取って代わるものだった。ヴァスプラカンの長官ニケフォロス・コムネノスとブケラリオンのストラテゴス、ブルシアノスも、陰謀の嫌疑や不詳事を理由に解任されている。^⑦

貴族勢力は権力から遠ざけられただけでなく、皇帝からの激しい弾圧にも耐えねばならなかった。とりわけ、この面では、バルダス・フォーカス、バシレイオス・スクレロス、コンスタンティノス・ブルツェス、ロマノス・クルクアスなどは、十世紀に勢威を誇った旧門閥貴族の後裔たちが軒並み厳しい制裁を加えられているのが目にとまる。^⑧

コンスタンティノス八世の反貴族的な姿勢は、兄弟が対ブルガリア戦争の戦費調達を名目に導入したアレングィオン制(税収の欠損分を有力者に負担させる制度)を、この戦争が一〇一九年に帝国によるブルガリア併合で終結した後も、貴族勢力の強い不満にもかかわらず、撤回しなかった点にも窺えよう。^⑨

以上見てきたごとく、この皇帝の貴族排除と側近への権力集中の動きは首尾一貫しており、我々はそこに、属州軍事貴族層を遠ざけて枢要な地位を側近の宦官たちで固めたという点で、もともと典型的な「文官派」皇帝(もし、そのようなものが存在したとするならば)の姿を見出しうるのである。

だが、こうした皇帝の下でも、貴族家門の出身者で高い官職に留まり続けた例外的な存在があった。それは、首都長官のロマノス・アルギュロス(言うまでもなく、後のロマノス三世)、シルミウム長官(ドゥク)からブルガリア長官に転じたコンスタンティノス・ディオゲネス、サモスのストラテゴス、ゲオルギオス・テオドロカノスである。^⑩

ケマーは、この事実のみを指摘し、それ以上の穿鑿はしていない。^⑪けれども、さらに詳しく調べてみると、この三者には幾つかの共通性があったのに気付く。後述するように、ロマノス・アルギュロスとコンスタンティノス・ディオゲネス

は縁戚関係にあったのだが、それを別にして、テオドロカノスをも含めた三者に共通するのは、程度の差こそあれ、いずれもが、バルカン・西方属州に関係の深い家門に属していたことだ。先帝バシレイオス二世治下以来、終始バルカン地方の軍事官職にあったディオゲネスは言うにおよばず、テオドロカノス家もその始祖(おそらくゲオルギオスの父)がバシレイオス帝の下で対ブルガリア戦に従事し、フィリップポリス総督の地位に就いていた^⑫、アルギュロス家も、マリアノスの時代以降、活動の場を西方に移していたのは、既に見たとおりである。

さらに、ゲオルギオス・テオドロカノスの就いていたサモスの長官職は、かつてバシレイオス・アルギュロスも務めた官職であることを思い出してほしい。そのうえ、時代は下るが、バシレイオス・テオドロカノス(ゲオルギオスの兄弟?)が、一〇三八年から四三年にかけてイタリアで軍務に就いていたことも、アルギュロス家のキャリアと類似している点として興味深い。一〇四三年夏、ロシア艦隊が帝都に来襲した際、このバシレイオスが帝国海軍の指揮を執っていることと、ゲオルギオスの海軍テマ、サモスの長官職在任をあわせ考えるならば、テオドロカノス家が海軍のエキスパートとして帝国に仕え、まさにそうした資格で、帝国本土とは海を隔てたイタリア戦線に派遣されたことが理解できるだろう。そして、そうした行動の軌跡は、バシレイオス・アルギュロスにもそのまま当てはまるのである。^⑬

ここまで論じれば、コンスタンティノス八世政権の下で官職を保ち続けた家門に共通する性格が、おのずと明らかになるだろう。それらはいずれもバルカン属州に縁が深く、そのうえアルギュロス家とテオドロカノス家は海軍に繋がりをもつ点でも共通していた。これらバルカン・グループとでも称すべき家門が、コンスタンティノス八世の権力を支える支柱のひとつであったことは疑いない。後に見るごとく、ロマノス三世政権も、こうした人脈を自己の支持母体として継承していた。

ただし、旧ブルガリア王族ブルシアノスの官職剝奪に見られるように、バルカン地方に利害を有する全ての貴族家門がコンスタンティノス八世の下に結集していたとは言い難いのも事実である。こうしたバルカン貴族内部の確執もまた、不

幸なことでローノス三世政權に引き継がれることになる。

① Theophanes Continuatus, ed., I. Bekker, Bonn, 1838, p. 374.
 ② *ibid.*, p. 374.
 ③ *ibid.*, p. 369.
 ④ オウスタンオス=ブルキアロスが「オナレリ」のサテキスエチ一ス、カリンソンのスエチ一ス等々を歴任した。*ibid.*, p. 368f.; Constantine Porphyrogenitus, *De Administrando Imperio*, ed., Gy. Moravcsik & R. J. H. Jenkins, Washington D. C., 1967, p. 238.
 ⑤ イケン=ナンキアロキが「カリンソン」一族のサテキスエチ一スに「御通訳を兼任して」後、彼の息子のサキタキスエチ一スに継いでいる。Theophanes Continuatus, p. 374, イケンの従者と「Ioannes Scylitzes, *Synopsis Historiarum*, ed., H. Thurn, Berlin, 1973, p. 189」の「家人 *τῶν ἀγορευῶν*」との「用語を承るべき」。
 ⑥ ヨセフの小ブシム軍事貴族家門の異説(通説と)に「サテキスエチ一ス」の貴族の世帯(『古代文化』四一巻「サ」一九九九年「三三—三十四頁」参照)である。
 ⑦ Theophanes Continuatus, p. 401 f.; Constantine Porphyrogenitus, *De Administrando Imperio*, p. 240; cf. M. W. Hertlog, *Kinship and Social Mobility in Byzantium, 717-919*, Ph. D. thesis, The Catholic University of America, 1986, p. 180.
 ⑧ Theophanes Continuatus, p. 399.
 ⑨ *ibid.*, p. 453 f. 480; V. von Falkenhansen, *Untersuchungen über die byzantinische Herrschaft in Südtalien vom 9. bis ins 11. Jahrhundert*, Wiesbaden, 1967, S. 81.
 ⑩ Leo Diaconus, *Historia*, ed., C. B. Hase, Bonn, 1828, p. 37, 45f.;

ルンダ。

⑪ ロマンク・ソシレイクス兄弟の官職経歴が顕著な対照性を示した背後には、当時のビザンツ貴族家門で一般的なだった分割相続の慣行がある(その点も参照 (cf. Stavrakas, *The Byzantine Provincial Elite*, p. 65f.)). イキア・ブルキアロキ家の家風(の「サ」ロマンクが「同各の祖父以来、都々降された宮廷貴族としての遺産を、サシソシレイクスが、始祖以来の軍事貴族としての伝統を、それに付随する資産と共に相続した」(註釈参照)に於いて)。
 ロマンクの父を継いで即位を承る「ヤギヤニ」マンニ=キエキアロキが「その娘のレオンと結婚して」サシソシレイクスは「オシソシレイクス=マンニキアロキが小ブシムの家領を相続した」こと、一〇五七年のイサキオス=ロムキオスの反乱に結集した小ブシム貴族のなかで、彼の息子の「蘇を隠る」に於いて「ヨセフ」を「Scylitzes, p. 488」。
 ⑫ Kamer, *Emperors and Aristocrats*, pp. 92-120.
 ⑬ Scylitzes, p. 370; Michael Psellus, I, p. 27.
 ⑭ Scylitzes, p. 370.
 ⑮ 十世紀の半ば、リタクコロス二世「ネキアス帝」が「ステパヌ」タメナクトゥ(軍事官職を新設したのは、彼の家人「ペトロ」スが「高官」だった)「ムクケ」アロキ・エーン・ニコロンに任じて、サシソシレイクスは「それ」に継いで「官職」が「必要」な「たまたま」たどる。cf. N. Oikonomides, *Les listes de préséance byzantines des IX^e et X^e siècles*, Paris, 1972, p. 334.
 ⑯ cf. R. Guiland, *Recherches sur les institutions byzantines*, Berlin-Amsterdam, 1967, I, p. 449.

Constantine Porphyrogenitus, *De Cerimoniis Aulae Byzantinae*, ed., J. Reiske, vol. I, Bonn, 1829, pp. 435-437.
 ⑰ Stavrakas, *The Byzantine Provincial Elite*, p. 51. イケンが「サテキスエチ一ス」は「彼の父サキアゴス」の「ムクケ」が「Yannier, *les Argyroi*, n°28, p. 54. の大塚《Jean Argros, préospathaie epi tou chrysotriklinou et notaire imperial de Cappadoce, secrétaire privé de secrète du Forum (?)》(『一』一巻「サテキス」)。
 ⑱ Giovanni Diacono, *La cronaca veneziana*, G. Monticolo ed., *Cronache Veneziane Antichissime*, vol. I, Roma, 1890 (rep. Torino, 1969), p. 168.
 ⑲ Z. Zepos & P. Zepos, *Jus Graeco-Romanum*, Athen, 1931, vol. IV, p. 229.
 ⑳ *ibid.*, p. 198.
 ㉑ Ioannes Zonaras, *Epitome Historiarum*, III, ed., T. Büttner-Wobst, Bonn, 1897, p. 573.
 ㉒ Michael Psellus, I, p. 30.
 ㉓ Scylitzes, p. 348.
 ㉔ *ibid.*, p. 355.
 ㉕ Giovanni Diacono, pp. 167-169; Scylitzes, p. 343.
 ㉖ Vannier, *les Argyroi*, p. 41 f. 47; V. von Falkenhansen, "A Provincial Aristocracy: The Byzantine Provinces in Southern Italy (9th-11th Century)", in M. Angold ed., *The Byzantine Aristocracy IX to XIII Centuries*, Oxford, 1984, pp. 211-235. esp. p. 227 f. 247. ヴァンニエの年代記(註)を参照。「マンニキアロキの兄弟「ケン」が「サシソシレイクス=ブルキアロキの弟」に反する説(註)を「サシソシレイクス」の「説」を参照」。
 ㉗ Scylitzes, p. 371 f.; Kamer, *Emperors and Aristocrats*, p. 162.
 ㉘ Scylitzes, p. 371 f. ヴルダス=ブキアスが「十世紀後半に小ブシムの大反乱を起した同名の人物の孫、ソシレイクス=メステロキが、この大規模な反乱の主謀者だった」(注)。メステロキの孫「コンスタンティン=ブルツキス」は「かつつの「ペンテ」アキア長官「カエル」=ブルツキスの息子、ロマンク=クルツアスは「ササ」回各の東方の「スエラ」トリーキス(註) cf. Kamer, *Emperors and Aristocrats*, pp. 168-171.
 ㉙ Scylitzes, p. 375; Kamer, *Emperors and Aristocrats*, p. 158 f.
 ㉚ Michael Psellus, I, p. 30.
 ㉛ Scylitzes, p. 373.
 ㉜ *ibid.*, p. 373.
 ㉝ Kamer, *Emperors and Aristocrats*, p. 162.
 ㉞ ソシレイクス(註)「レ」彼は「ササ」長官「ソシレイクス」長官を継いだ (Scylitzes, p. 356, 365 f.; Kamer, *Emperors and Aristocrats*, p. 109)。
 ㉟ だが、彼の「本拠地」は「キキ」地方であった(註)。(Zonaras, III, p. 685) の「サ」の「点」は「小ブシム」に「所領」を「維持」して、西方に「距離」の「場」を「移」した「マンニキア」家との「共通性」が「認め」られる。

⑳ Scylitzes, p. 343; cf. N. Adonzi, *Studiis armeno-byzantines*, Lisbonne, 1966, pp. 154-156.
 ㉑ Adonzi, *Etude armeno-byzantines*, p. 158. 註「両者を始祖「ネ」マンニ」の「息子」が「サシソシレイクス」。
 ㉒ Scylitzes, p. 406, 413; Falkenhansen, *Südtalien*, S. 92.
 ㉓ Scylitzes, p. 431 f.
 ㉔ さが「サシソシレイクス」が「ローノス」が「中央」の「首領長官職」が「継」いで「無関係」では「な」かった。さ「サ」の「サ」九世紀の「首領長官職」が「創設」

されるまで、帝都周辺の海上警備は首都長官の管掌下にあったし、また、コンスタンティノールを訪れる商船の統制、関税の徴集等を担当するヌラタリチスは、十一世紀半ばに至るまで、彼の下僚だった。cf. H. Ahrweiler, "Fonctionnaires et bureaux maritimes".

times à Byzance", *Revue des Etudes byzantines*, 19, 1961, pp. 239-252, 246-250; Id., *Byzance et la mer: La marine de guerre, la politique et les institutions maritimes de Byzance aux VII^e-XV^e siècles*, Paris, 1966, p. 175.

三 四 羅馬ノス三世政權の発足

1 登位の経緯

前章で見たごとく、ロマノス・アルギュロスは、コンスタンティノス八世政權下で要職にあった数少ない貴族の一人であり、その点から見れば、コンスタンティノス帝が、自己の重臣で、高貴な出自の彼を後継者に選んだのも格別不思議なこととは思われぬかもしれない。ところが現実には、彼が正式に次期皇帝に選出されるまでには、いささかの紆余曲折を経なければならなかった。一連の状況について、史家スキュリツェスの語るところを聞こう。

「紀元六五三七年（西暦一〇二八年）、第十二インディクティオの年、十一月九日、コンスタンティノスが急病に見舞われた。医者に見放された彼は、後継者として誰に帝権を委ねようかと思案した。そこで彼は、アルメニアコンの自分の屋敷で暮らしていたパトリキオスのコンスタンティノス・ダラッセノスに使いを送り、彼を自分の娘の一人の婿にして、皇帝として宣言させようと考えた。（中略）ところが「ドロンガリオス・テース・ヴィグラースの」シュメオンはパトリキオスのロマノス・アルギュロスに強い好意を抱いていたので、皇帝は意見を覆えて、ダラッセノスの許には、書状をその地で受けとるためその場で待機するよう命じる皇帝の急便を送り、ロマノスが帝権の玉座に昇ることになったのである。」^①

以上から、皇帝コンスタンティノスの当初の意中の人物はコンスタンティノス・ダラッセノスだったこと、ところが寵臣のひとり、宦官のシュメオンの働きかけで結局、後継者がロマノス・アルギュロスに決まったこと、がわかる。廷臣のシュメオンが、典型的な属州軍事貴族のダラッセノスよりも、自己の僚友のアルギュロスを強く推したのは、いかにも自然な行動のように見える。^② ここで理解し難いのは、コンスタンティノス帝が、それまで冷遇してきた小アジア系の貴族勢力の一員に自己の地位を譲り渡そうとしたことだ。しかも皇帝は、当のコンスタンティノス・ダラッセノスから以前、アントキア長官職を取りあげたはずではなかったか。^③ スキュリツェスの記述は、この点について何の手がかりも与えてはくれないので、我々としては、乏しい状況証拠のなかから、皇帝のこうした行動の背景を探り出すほかはない。

まず、コンスタンティノス帝が死の間際に貴族勢力との妥協に転じた理由についてだが、遺憾ながら、このことに関しては、現時点では、何ら確定的なことを述べることはできない。自己の後継者として国政の実権を委ねる以上、最も安定した支配権を樹立しうる者にそれを託そうと皇帝が考えるのも無理はなく、その点で、有力貴族の一人を選ぶしかなかった、と推察するのが精一杯なところである。

では、並いる貴族たち（ケマーは、バシレイオス二世の下で重用された二九の新興家門、一定の影響力を維持した七つの旧門閥貴族の家系を列挙している）^④ のなかで、コンスタンティノス・ダラッセノスに白羽の矢が立てられた理由は何か。ここでは、ケマーの示す貴族家門とその構成員のリストを丹念に読み返してみることが肝要だ。この作業を通して、筆者はひとつの事実を発見した。それは、バシレイオス二世治下に同一家門内で複数の重要官職就任者を出しているのは、アルギュロス、コムネノス、クシフィアスなど教家門に留まり、それらのなかでも父子二代にわたり四人もの軍指揮官を輩出したのはダラッセノス家のみである、という事実である。そこで、この時期に至るまでのダラッセノス家発展の歴史を簡単に整理しておけば、以下のようになる。^⑤

同家の歴史は、コンスタンティノスの父ダミアノスが九九五年にアンテオキア長官に任じられたときに始まる。九九八年、彼は、アパミア付近でのイスラム軍との戦闘で生命をおとし、彼に従って軍に加わっていた二人の息子（コンスタンティノスとテオフルクトスであろう）は捕囚となってエジプトに連れ去られた。^⑥ 十年後に解放されたダラッセノス兄弟は、

優れた軍人として晩年のバシレイオス二世を支えた。コンスタンティノス・ドラッセノスは一〇二四年にアンティオキアのドゥクスに就任しているし、彼の兄弟テオフィラクトスは一〇二二年、ドロンガリオス在任時に、おりから小アジアで勃発した両ケフォロスの反乱追討を指揮するため、アナトリコンの長官ストラテゴスに任じられている。その後彼は、帝国北東部の国境地帯、イベリアとヴァスプラカンの長官職を歴任し、また、コンスタンティノスと相前後してアンティオキアのドゥクス職をも占めたい。さらに彼らの末弟のロマノス・ドラッセノスも、イベリアの長官職に就いている。

ここまで見ると、ドラッセノス家の成員たちが占めた官職に、明らかな特徴があるのに気がつくだろう。四人中、アンティオキアの長官を務めたのが三人、イベリアの長官も二人いる。ドラッセノス家がこの二つの地域に深い利害を有していたのは間違いない。そして、バシレイオス二世没時に三人の高級武官を擁していたドラッセノス家の勢威は、他家門のそれを大きく凌駕しており、一時は同家の排除を図ったコンスタンティノス八世も、結局は彼らの実力を無視できなかつたのではなからうか。

だが、土壇場でコンスタンティノス帝は前言を翻し、コンスタンティノス・ドラッセノスではなくロマノス・アルギュロスの後継者に指名した。この結果、アルギュロスは、帝国東部国境に隠然たる影響力を有する潜在的なライヴァルをもつことになる。皇帝即位後の彼の行動には、ドラッセノスへの対抗意識がしばしば顔をのぞかせるのを、後に我々は目にする事だろう。

この二人の人物の門地、経歴はおよそ対照的と言わざるをえない。古い軍事貴族の出自ではあるが、一貫して中央文官として生涯を送り、首都の宮廷に濃密な人間関係を有したアルギュロス。一方のドラッセノスは新興家門の出身で、都から遠く離れた東部国境で武人としての日々を過ごしてきた。ロマノス・アルギュロスがドラッセノスにコンプレックスを抱いたとすれば、それは彼我の軍事経験の差をおいて他にあるまい。真に皇帝の地位に相応しい者として万人に認められるためには、この面においても、アルギュロスは自己のライヴァルに勝る才能を示す必要があつた。名門軍事家系の後裔

としての意地もあつただろう。しかも、自ら軍の先頭に立って幾多の武勲をあげたバシレイオス二世帝の記憶も、当時の人々の胸中にはまだ鮮明に残されていたと思われる。帝位に昇つたロマノス三世が、決然たる態度で大規模な軍事行動に乗り出すに至つた事情を理解するには、まさにこうした状況を考慮に入れておかねばならないのである。

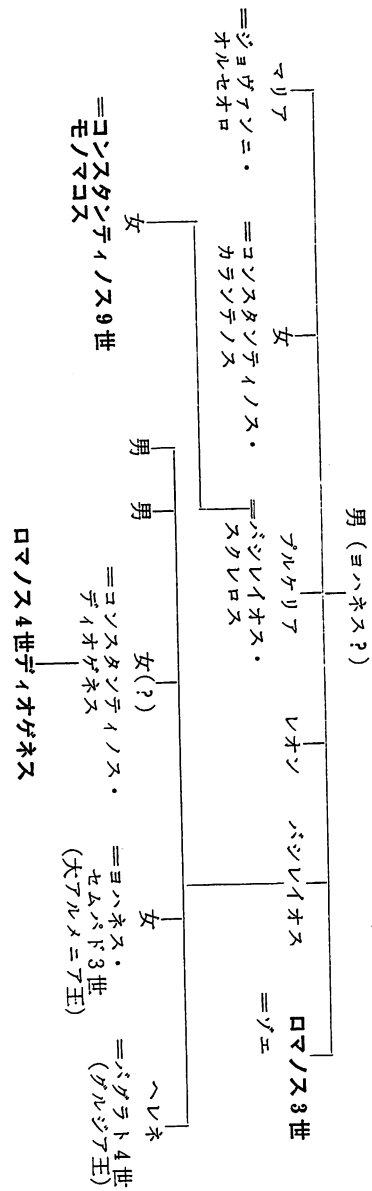
だが、同帝のシリア遠征の顛末について、本格的な考察に入る前に、我々は、発足したばかりの彼の政権を支えた人々の構成、および貴族勢力全般に対する同政権の対応等に一瞥を加えておきたい。

2 政権の人的基盤

貴族勢力に対するロマノス三世帝の態度は、即位直後の彼の行動に端的に表われている。彼はコンスタンティノス八世があればど存続に固執したアレレンギオン制を廃止して、貴族勢力の経済的負担を軽減してやると共に、彼らに金品や官位をばらまいて、その歓心を得ようと努力した。また、自己の姉妹の夫で、コンスタンティノス八世の勲気を被つて盲目にさせられたバシレイオス・スクレロス⑬をマギストロスに叙して厚遇し、バシレイオス二世治下末年に反乱を起こしたニケフォロス・クシフィアスを追放先から召還したことは、彼が、先行する二代のマケドニア朝皇帝の苛烈な貴族抑圧策とは決別し、むしろ貴族勢力と友好的関係を結ぼうとする意向を表明するものであつた。彼は、ライヴァルのコンスタンティノス・ドラッセノスに対しても、後にミカエル四世(在位一〇三四—一〇四一)が後者に示したような露骨な敵対的態度を示してはいない。ロマノス三世の権威は、五〇年もの間、たとえ名目的なものであれ、強力なバシレイオス二世と権力を共有し、マケドニア朝正嫡としての血統カリスマをも備えたコンスタンティノス八世のそれとは比べものにはならなかつたから、自らの政権を安定させるためには貴族勢力との無用な衝突は避け、それとの融和・協調を図ることが得策だと判断したのである。

だが、こうした表面的な親貴族政策とは裏腹に、ロマノス帝治下の重要官職就任者の顔ぶれを眺めてみると、同帝が、

ブルギユロス家系図(2)



註) 人名の太字は、皇帝を示す
①) は婚姻関係を表している。

注意深く自らの信頼しうる人物でそれらを固めていることが窺われる。その際、ロマノス三世政権の支持基盤を構成した人々は、二つのグループに大別できそうだ。ひとつは、皇帝自身と縁戚関係にある貴族家門、もうひとつは宦官である。以下、各々のグループの成員について、もう少し詳しく吟味しておこう。

まず、第一のグループについてだが、皇帝自身の属すアルギユロス家の成員で重要官職に就いているのは一人しかいない。一〇二九年に同家ゆかりの地、イタリアの長官に任じられたポトス・アルギユロスである(系図一の⑩)。彼は、前章一節で触れた同名のポトス・アルギユロスの子孫と思われる。それ以外のアルギユロス家の成員に関しては、ロマノス帝の兄弟バシレイオスはバシレイオス二世治下にヴァスプラカンの総督職を解任されて以来、史料から姿を消しているし、

後者の息子たちもこの時期、いかなる地位にあったか全く詳らかにしえない。

むしろ、ロマノス三世の政権でより大きな役割を演じたのは、アルギユロス家と婚姻同盟で結ばれた貴族家門の成員たちであった(系図二参照)。先に述べたように、皇帝の姉妹ブルケリアの配偶者、バシレイオス・スクレロスは、ロマノス帝の下でマギストロスの位に昇り、ことによると、盲目の身でありながら、テマ・アナトリコンのストラテゴスの地位に就けられていた可能性もある。そして皇帝のもう一人の義兄弟、コンスタンティノス・カラントノスは、一〇三〇年にアンテ・イオキア長官に任命され、シリア遠征を行なう皇帝の露払い役を果たしている。カラントノス家からはもう一人、ニケフォロス・カラントノスがギリシアのナウプリオンでストラテゴス職に就いているのが目にされており、両者は近親関係にあったと推測される。

一方、ロマノス帝の姪と結婚していたコンスタンティノス・ディオゲネスは、一〇二九年当時、テッサロニケの長官として帝国の西方属州軍を統轄する地位にあった。彼は十年以上もバルカン地方で軍指揮官職を果たしてきた歴戦の将軍であり、軍事に疎く、とりわけ東方の軍勢に強固な足がかりをもたぬロマノス帝にとっては、軍事面の支柱として心強い味方となるはずの人物だった。

このほかにも、アルギユロス家との縁戚関係は確認できぬが、エクスキュピテス軍団長官として一〇三〇年のシリア遠征に加わっているレオン・コイロスファクテス、バシレイオス・スクレロスとブルケリア夫妻の娘(ロマノス帝にとっては姪)と結婚しているコンスタンティノス・モノマコス、などが主要な支持者として挙げられるであろう。

こうしたロマノス三世帝の同盟家門の顔ぶれを閲覧するとき、それらに幾つかの共通項があるのに我々は気付く。先にコンスタンティノス八世治下に影響力を維持した家門がいずれもバルカン・西方属州に縁が深いこと、そして海軍との繋がりを有する家系があったこと、を指摘したが、ロマノス三世の権力基盤を成したのは、それらに首都の宮廷貴族・高級官僚を加えた集団だったのではなからうか。すなわち、西方属州に拠点をもつディオゲネス、コイロスファクテス(ペロ

ボネッス出身^②、カランテノス（ケファレニア島のカランティナ村出身？、同家は海軍業務との関わりも深かった）の諸家門を一方に置くとするれば、他方にはスクレロス（同家は十一世紀半ば以降、文官への転身が明瞭になっていく）とモノマコス（コンスタンティノス・モノマコスの父は、首都法廷の裁判官であり、たぶん司法官時代のロマノス帝の同僚だった）の両家門がある、という具合である。

その他の有力家門の成員で、ロマノス三世治下に軍事官職を占めていたのは、新人のゲオルギオス・マニアケスを別にすれば、あのコンスタンティノス・ダラッセノスが目にされる程度（後述することく、これには皇帝の周到な計算が秘められていたようである）であることもわかるように、同帝と同盟関係にない有力貴族層は表面的な榮譽を与えられつつ、注意深く、実質的な権力からは遠ざけられていたらしい。

これに対して、コンスタンティノス八世の下で幅をきかせた宦官勢力は、ロマノス三世の政権においても依然として一大勢力を誇っていた。なかでも、ロマノスの皇帝即位の立役者とも言えるシユメオンは、ドメスティコス・トーン・スコロンとして軍隊の頂点に立った。彼以外でも、中央政府の実権を徐々に掌握するに至るパフラゴニア家のヨハネス・オルファノトロボス^③、オフリダのストラテゴスのエウスタシオス・ダフノメレス^④、イタリア長官のオレステス^⑤、同じくイタリアで艦隊を指揮したヨハネスなど、バシレイオス二世、コンスタンティノス八世に仕えていた人々の顔が多く見い出され、この面での前政権との連続性が窺われる。

他方、ロマノス・アルギュロス直系の家人として名前が確定できるのは、近衛軍長官でストラテゴス・アウトクラートルとしてシリアに遣わされたテオクティストスひとり^⑥に留まる。しかし、スキュリツュスが彼を「皇帝に最も忠実な従者のひとり」と称しているところを見れば、他にも彼と同様な存在が皇帝に近侍していたことが想定されよう。

このように見てくると、ロマノス三世政権の寄り合い所帯的な性格がはつきりと浮かびあがってくる。それは、皇帝と同盟関係にある貴族家門（それ自体、さらにバルカン軍人層と首都廷臣層との分裂を内包していた）と、前政権との連続性が強い宦官層を二本の支柱としており、その上に自身の側近を抱えたロマノス帝が立つ、という構図で描き出すことができそうだ。

その後の政治過程の推移から判断する限り、ロマノス三世の政権は、現実には、皇后ゾエと宦官ヨハネス・オルファノトロボス、バシレイオス・スクレロスとブルケリア夫妻、そして先帝コンスタンティノス八世のもう一人の娘テオドラとコンスタンティノス・ディオゲネスを各々領袖とする三つの派閥から構成されていたと考えられる。前述の構図で言えば、同盟貴族家門のうち、スクレロスを中心とする宮廷貴族が第二グループ、ディオゲネスらマケドニア朝恩顧の西方軍人層が第三のグループ、そしてマケドニア朝以来の非門閥系廷臣・宦官層の大部分が第一のグループをかたちづくっていた、と思われる（なお、アルギュロス家直系の家人層は、ブルケリアの主導する第二グループに近かったらしい）。当初の段階ではゾエとブルケリアの二つのグループが政権内主流派、そして現政権とは一定の距離を保つ姿勢を示していたテオドラのグループが非主流派を成していたと想定できるだろう。さらに、政権の外部には、コンスタンティノス・ダラッセノスを初めとする小アジア軍人層が潜在的な反体制勢力として存在していた。

こうした政権内部の複雑な派閥力学を巧みに調整し、さらに権力から排除された勢力の不満を抑えるには、皇帝に並々ならぬ統率力が求められたことは想像に難くない。その点で、大規模な軍事行動は、都でのパワーゲームに明け暮れる支配層に団結を訴え、皇帝への求心力を強めるうえで絶好の機会であった。ロマノス三世アルギュロス帝のシリア遠征は、かくして皇帝とそれを取り巻く人々の様々な思惑を秘めながら、実行に移されたのである。

① Scylitzes, p. 373f.

② ただし、ここに、安易に首都の文官派と属州の軍人派との対立の図式を適用するのは危険である。というのも、シユメオンは後にミカエル四世のコンスタンティノス・ダラッセノスに対する抑圧政策を批判する側にまわり、その結果、首都追放の憂き目にあってからである。

③ Scylitzes, p. 396.

④ 本稿第二章第一節参照。

⑤ Kamer, *Emperors and Aristocrats*, pp. 100-113. 後者のカテゴリにアルギュロス家も含まれる。

⑥ ダラッセノス家のプロンボグラフィー研究は、以下の諸文献を参照。

- Adontz, *Études arméno-byzantines*, pp. 163-177; A. П. Кавдан, *Армяне в составе византийского царства Византийской империи в XI-XII вв.*, Ереван, 1975, стр. 92-97 J.-C. Cheynet, "Trois familles du duché d'Antioche", dans J.-C. Cheynet et J.-F. Vanhier, *Études prosopographiques*, Paris, 1986, pp. 75-115.
- ⑧ I. Kratchkovsky et A. Vasiliev, éd., *Histoire de Yahya-ibn-Saïd d'Antioche*, *Patrologia Orientalis*, t. 23, fasc. 3, p. 456. 474^h ノルマン人家族メンリク・ユダハの領土について、cf. Etienne Assirik de Taron, *Histoire universelle*, traduite de l'arménien et annotée par F. Macler, Paris, 1917, p. 150.
- ⑨ Cheynet, "Trois familles", p. 80.
- ⑩ 史料に正確な官職名が示されていないが、このため彼が持っていたのは、エロンガリオス・テオドシオス(軍官整備長官)と題された^⑩ *ibid.*, p. 82, n. 94.
- ⑪ Scylitzes, p. 367.
- ⑫ 2人の3人の軍事官職への就任は、印章資料により確認される^⑫ Cheynet, "Trois familles", p. 83 f.
- ⑬ J. C. Cheynet, 現在のメソポタミア領ヨルダン(旧トキヤシメリス)の城壁に建てられた碑銘から採らば、Cheynet, "Trois familles", p. 85; Adontz, *Études arméno-byzantines*, p. 163, 170-172.
- ⑭ Scylitzes, p. 375 f.
- ⑮ *ibid.*, p. 376. 224^h ノルマン・メソポタミア領が明らかでない^⑮ *ibid.*, p. 376.
- ⑯ Falkenhansen, *Sudationem*, S. 88.
- ⑰ 印章資料から下記の二人のブルキエロスがこの前後に軍事官職に就

- したことが知られているが、ノルマン帝との正確な係累や当該官職の在任時期を詳らかにすることは、もとより不可能である。
- ⑱ ノルマン・テオドシオス = ブルキエロプロロス
—— ヴァニエロク・サキエのステラテートク (Vannier, *les Agyroi*, p. 55)
- ⑲ ヴェロク = ブルキエロク
—— トリツケリネク・カネチエフのステラテートク (Stavrakas, *The Byzantine Provincial Elite*, p. 53)
- ⑳ W. Seibt, *Die Skleroi: Eine prosopographisch-stillographische Studie*, Wien, 1976, S. 68-69.
- ㉑ Scylitzes, p. 377.
- ㉒ *ibid.*, p. 386 f.
- ㉓ *ibid.*, p. 376.
- ㉔ *ibid.*, p. 380.
- ㉕ Michael Psellus, I, p. 124 f.
- ㉖ cf. Guiliand, *Recherches*, II, p. 182. 『開元通訳』のなを、10世紀末のメソポタミア有力者として登場する「カネ = ノルマン・メソポタミア」は、^㉖ *ibid.*, p. 380. D. F. Sullivan ed., *The Life of Saint Nihon*, Brookline, 1987, p. 194.
- ㉗ Vannier, *les Agyroi*, p. 42, n. 14, n. 1. したがって「同家」のメソポタミア地方にも所領を有していたと計算が高い。cf. N. Mersich, "Zur Person des Theodoros Karantenos: Anmerkungen zu einer byzantinischen Inschrift aus Pisdien", *Jahrbuch der österreichischen Byzantinistik*, 37, 1987, S. 323-327 mit einer Tafel.
- ㉘ 同家の成員として本書に初めて登場するヴェロク = カネチエロクは、九七七年、ブルダヌス = クレオメの反乱の際に、皇帝側の海将 (ναύαρχος) として叛徒の艦隊を破った^㉘ Scylitzes, p. 322. #

- た、時代は11世紀後半に、カトリコカンテンノスはシリア東部の任地であった。Mersich, "Theodoros Karantenos", S. 324; D. Tsougarakis, *Byzantine Crete: From the 5th Century to the Venetian Conquest*, Athens, 1988, pp. 182-184.
- ⑳ A. П. Кавдан, *Сочувательный состав византийского царства Бузантии XI-XII вв.*, Москва, 1974, стр. 141.
- ㉑ Aristakès de Lastivert, *Récit des malheurs de la nation arménienne*, Traduction française avec introduction et commentaire par M. Canard et H. Berbérian, Bruxelles, 1973, p. 42.
- ㉒ 彼はその武功により、東南国境のテルシシ (現トルコ領ガジマン・ツァップの北) のストラテゴスから、トメテオス長官に昇進した。

四 外征と陰謀

本章では、ロマノス帝が行なったシリア遠征の過程を追ひ、それが彼の権力の維持・強化に果たした役割を検討してみた。その際、その前後に宮廷内で発生した陰謀事件の内容をもあわせて分析することにしよう。それによって、当時の政権中枢で演じられた権力闘争の推移や、そこで皇帝のシリア遠征が帯びた政治的意味合いを浮かびあがらせることができるからである。

ロマノス三世の政権内に三つの派閥が存在したことは先にも述べたが、以下、同帝の治世中に数度にわたって繰り返りひろげられた陰謀事件は、いずれも、これら三グループ間の主導権争いとして解釈することができる。

即位後ほどなくして、皇帝は相次いで二度の陰謀事件に見舞われた。ひとつめは、旧ブルガリア王族のブルシアノスが皇后ゾエの姉妹テオドラと結託して帝位を狙っていると告発され、マヌエル修道院に監禁されて目をえぐられた事件、二

つめはテッサロニケ長官^{ドロンクス}、コンスタンティノス・ディオゲネスが反乱を企てていると宦官のオレステスに告発され、共謀者共々処罰された事件である。^⑩

スキュリツェスは、この二つの出来事を受けて報じており、ことによると、それらは連動したものであったのかもしれない。そう思わせるひとつの根拠は、いずれの事件の背後にも、権力の外におかれたテオドラの影がちらついていることだ(ディオゲネスの陰謀事件の発覚後、テオドラは皇宮を逐われ、ペテリオン修道院へ移された^⑪)。そう考えると、一見、無謀としか思えぬブルシアノスの行動にも、ある程度の蓋然性を感じられるようになる。彼を行動に駆り立てた理由について、ケマーは、かつて激しく対立したバシレイオス・スクレロスが新政権の重鎮として迎えられたことに對する彼の絶望感から説明しているが、それが、権力から疎外された不満派貴族たちの、テオドラを結集のシンボルとする、大規模な反政府陰謀の一環を成していたと考えるならば、彼がそこにある程度の成算を見出し出したと想像することもできるだろう。ディオゲネスの共謀者にブルツェス家のミカエル、テオグノストス、サミュエルの三兄弟、ゲオルギオス・バラスバツェ、テウダテスの従兄弟ら、当時、何の官職も帯びていない軍人層が含まれているのも、こうした視角から説明が可能である。

おそらく、この陰謀事件は、ロマノス三世・ゾエ夫妻と一線を画すテオドラを黒幕に、一方にブルシアノスやブルツェスなどの不満派貴族、もう一方に、予定されたシリア遠征について自己の意見が尊重されず、軍の最高幹部としての自らの威信の低下に危機感を抱いたコンスタンティノス・ディオゲネスらが提携して仕組んだものだった、というのが真相に近いのではなからうか。いずれにしても、皇帝が東方へ軍を進めようとする矢先に、西方軍の押えとなるべき人物が謀反騒ぎを起こしたことは、ロマノス帝にとって頭の痛いことだったに違いない。通常、大逆罪違反者に適用される摘眼刑がブルシアノス以外には課されず、ディオゲネスには禁固、その他の共謀者は市中引き回しと追放、といった相対的に軽い処罰に留まったのも、東方遠征を控えて軍内に動搖が広がるのを抑えようとする皇帝の気持ちの表われと思われる。^⑫

即位直後の陰謀事件をなんとか克服したロマノス三世は、宿願のシリア遠征へと邁進した。しかし、ここでひとつ疑問が沸いてくる。なぜ、皇帝はシリアを遠征の目標に選んだのか、という点だ。当時、帝国とアレップのアラブ太守との関係が悪化していたのは事実^⑬。たとえて皇帝自身が数万とも言われる大軍を率いて遠征をかける必要性があったのか、いささか疑問と言わざるをえない。あるいは、死の直前にバシレイオス二世が計画していたと言われ、アルギューロス家も強い足場をもつイタリアへの遠征でもよかつたのではないか。遠征の目的地が決定された事情について、プセルロスは次のように報じている。

「軍事的名声を熱望して、彼(ロマノス三世)は東西の蛮族に対する戦争を準備した。西方の蛮族に対して勝利を得ることは簡単だが、たいした手柄にはならぬように思われた。しかるに、東方の敵を攻めることは自己に名声を得させるであろう、と彼は考えたのである。」^⑭

もしも、この報告が事実だとすれば、この軍事行動は、皇帝の榮譽への渴望に起因するものであり、その目的地は極めて恣意的に決定されたことになる。皇帝は出陣に先立って、凱旋式でかぶる豪華な冠を発売したという^⑮。彼にとって、勝利は自明のことであり、それをいかに華々しく演出し、自己の威信を高めるかが問題だったのだ。そしてその際に、シリアのイスラム領に對するビザンツ側の前進基地がアンティオキアであり、この町がダラッセノス家の勢力基盤と目されていたこと(後にミカエル四世の治下、この町で市民の反政府行動が起きたとき、皇帝政府はそれを、コンスタンティノス・ダラッセノスに指張されたものとみなしたことを想起せよ^⑯)は注目すべきであろう。ロマノス帝があえて東方へ軍勢を進めたことの手がかりは、このあたりにあるのではあるまいか。

ともあれ、新兵を徵募し、外人傭兵を集めて軍の陣容を整えた彼は、一〇三〇年三月三十一日に帝都を出発、小アジアのフィロミリオンを経て、七月二〇日にアンティオキアに到着した^⑰。同市入城に際して、ロマノス帝は、華麗なページェントを挙行する。プセルロスは、その後の皇帝軍の敗北を予示する口ぶりでも、「それは王者に相応しい行列であったが、しかしその陣容はむしろ芝居がかつていて、「戦士に」値するものでもなければ、敵の心に恐怖の念を感じさせることもで

きないものだった」と述べている。^⑬

それにしても、まだ肝心の戦闘も行なわれておらず、しかも首都でなく前線の属州都市で、このような華美な式典が催されたのは、いささか奇異な感じを免れない。しかしこれも、皇帝がコンスタンティノス・ドラッセノスに対抗意識を抱いていたことを思いおこせば、得心がいくはずだ。その際、ドラッセノス自身がこの遠征に加わっていたことは重要なポイントであろう。カジュダンが推定しているごとく、今回の軍征に際しては、アンティオキアを押えるドラッセノス家に多大な援助の提供が要求されたと思われる。そのうえで、皇帝は、コンスタンティノス・ドラッセノスを従えて堂々とこの町に入城することで、アンティオキア市民の目に、ドラッセノスに優越する絶大な自己の権勢を見せつけようとしたのではないだろうか。^⑭

一週間後、アンティオキアを発った軍勢は真夏の猛暑のなかを行軍し、アレppoから二日の行程にあるアザーズの要塞を攻撃するため、その近くに陣地を築いた。^⑮ 皇帝は、エクスキュピナス軍団長官レオン・コイロスファクテスとその配下の部隊に偵察を命じたが、彼らはアラブ軍の待ち伏せ攻撃に遭い、多大な損害を受けて退却を余儀なくされる(その際、指揮官のコイロスファクテス自身が敵の捕虜となった)。

とかくするうち、水場をアラブ軍に押えられたビザンツ軍は、激しい渇きに襲われることになった。活路を開くために出撃したコンスタンティノス・ドラッセノスの部隊も敵の包囲網を破ることはできなかった。水不足と作戦の不首尾のために陣中に次第に不満と焦燥が募っていく。アルメニア人史家エデッサのマタイオスは、軍内に皇帝を戦場に置き去りにして体よく彼を仕末しようとする陰謀があったことを伝え、十三世紀半ばのアラブ史家イブン・アル・アティールはその主謀者を「ドゥークス(ないしドゥーカス)の息子」と報じている。それを、コンスタンティノス・ドラッセノスを指すものと見るカジュダンの説は、これまでの議論から、極めて魅力的なものと言えよう。しかし、遺憾ながら、それを立証しうる証拠は現時点では何もない。^⑯

いずれにしても、軍内の動揺はもはや抑え難い状態に達していた。そうしたなかで、ロマノス帝はついに退却を決意し、八月十日に撤退が始まる。しかし、それは当初から全くのパニック状態を呈し、そのうえアラブ騎兵の追撃を受けて混乱は倍加、帝国軍は全面的な潰走に移った。

「かつて全世界を平定し、戦争の備えと戦闘陣型において全ての蛮族の大軍に対して無敵であった軍勢が、そのときは敵を目にすることすら耐えられず、彼らの声の轟きだけで耳と魂を縮みあがらせて、全軍が雪崩れをうって敗走に転じたのであった。」^⑰

皇帝ロマノス自身、自己の天幕をはじめ、多くの財貨を敵の手に委ねたまま、かろうじて戦場を離脱し、アンティオキアへ戻った。かくして、彼が大望を抱いて敢行したシリアへの大遠征は惨めな失敗に終わり、皇帝の胸に苦い思いを残したのである。

だが、およそ四〇年後のマンツィケルトの戦の際とは異なり、当時のビザンツには、たった一度の敗戦では揺るがぬだけの国力が残されていた。翌年の一〇三一年には、勇将ゲオルギオス・マニアケスがエデッサを征服し、軍征失敗のショックも幾分か緩和された。けれども、一度失墜した皇帝の威信を回復するためには、何としても、彼自身がもう一度軍事遠征を実行する必要がある。^⑱

一〇三二年、大アルメニアの君主と自己の姪との婚姻を取り決めて、北東辺境の安全を確保したロマノス帝は、勇躍、二度めの遠征に乗り出した。^⑲ところが皇帝軍が小アジアのメサナクタの町に到着したとき、帝都に残る皇后ゾエから重大な情報が寄せられ、行軍はストップすることになる。かつて陰謀を企てたコンスタンティノス・ディオゲネスがテオドラと共謀して帝都からイリュリア地方への逃亡を企て、それにはデュラキオン府主教とペリテオリオン主教も内通していた、というのだ。ディオゲネスら一味は即座に逮捕され、彼の取り調べは、ヨハネス・オルファノトロボスに委ねられた。ところが不可解なことに、ディオゲネスはほどなくして市壁から墜落死し、投身自殺したものととして処理された。一方、陰謀に連座したとされる二人の高位聖職者は、メサナクタの皇帝の許に送られたが、どうやら無罪と認められたらしく、そ

の場で放免されている。

スキュリツェスの記述は例によって簡潔で陰謀が実際に存在したかどうかすら判然としないが、少なくとも以下の三つの点だけは記憶しておく必要がある。第一に、この「陰謀」事件の告発から処理に至るまで主導的な役割を演じたのがゾエとヨハネス・オルファノトロプスだったこと。彼らは、ヨハネスの兄弟ミカエルがゾエの愛人となることで、強く連携していた。第二に、事件が発生してその実質的な処理が終わるまで、一切の過程が皇帝の不在中に完了した。陰謀の主謀者とされるディオゲネスが不可思議な死を遂げたことで、皇帝は直接彼に尋問する機会を永遠に失ってしまった。共犯とされた主教たちが皇帝の面前で放免されたことも考えあわせるならば、この事件は、ゾエとヨハネス・オルファノトロプスの一派が、皇帝の介入を未然に防いだうえて、政敵のテオドラとディオゲネスのグループの放逐を企てて仕組んだものではないか、という疑惑をぬぐいざることができない。そうした思いは、第三のポイントとして、彼らこそがこの事件から最大の利益を享受した、という事実からも、いっそう強められるのである。というのは、ゾエとオルファノトロプスは、この事件を通じてテオドラとディオゲネスらの影響力を最終的に宮廷から葬り去ったばかりか、ロマノス帝のシリア進軍を中断させ、彼が武勲をあげて政権内でのリーダーシップを強める可能性をも封殺したからである。この事件の結果、ゾエ・オルファノトロプス派の宮廷内の地位は一段と強化されたことは間違いあるまい。

皇帝が都に戻ってまもなく、もうひとつの奇妙な「陰謀」事件が起きた。史家スキュリツェスの語るところは、こうである。

「皇帝の姉妹を介して彼と義兄弟の関係にあるマギストロスのパンレイオス・スクレロス（コンスタンティノス帝によって盲目にさせられていた）は、落ち着きがなく、情緒不安定であった。彼はロマノス帝によってマギストロスに叙せられ、多くの恩恵を被っていたにもかかわらず、彼に対して陰謀を企てた。しかし、捕えられて、その妻と共に都から追放された。」

それにしても盲人が、妻の兄弟に対して、しかも自らを不遇の身から救ってくれた恩人に対して、謀反を図るとは。それほどまでにロマノス帝の権威は地に墜ちていたのだろうか。

しかし、結論を急ぐべきではない。ミカエル・プセルロスが、別の角度からこの事件を照射してくれているからである。プセルロスの語るところによれば、ゾエとヨハネス・オルファノトロプス、ミカエル兄弟の結託の危険性を察知した皇帝の姉（スクレロスの妻）プルケリアと皇帝の寢室付きの人々（つまり皇帝側近の宦官たち）は、ロマノス三世に、彼を亡き者にしようとする策謀が進行中であることを告げ、警戒を怠らぬよう求めていた、というのである。ところが皇帝はこの忠告に耳を貸さず、何の処置も講じようとしなかった。そこでプルケリアとその同志たちは、ゾエとパフラゴニア家の兄弟に対して公然たる戦いを挑んだが、運命は彼らに味方せず、ほどなくしてプルケリアが死去、仲間の一人もその後亡くなり、もう一人は皇帝自身の命によって皇宮を退去させられて、政争は彼らの敗北で幕を閉じた。残されたプルケリア派の人々は、ある者たちは現状を甘受し、またある者たちは口を固く閉じることになったという。

以上のプセルロスの記述を、前のスキュリツェスのそれと重ねあわせてみると、この「陰謀」事件の真相とおぼしきものが浮かびあがってくる。すなわちそれは、権力闘争に勝利したゾエ・パフラゴニア家の徒党によって、スクレロス・プルケリア夫妻をパージするために仕立てあげられたものだった、と言えよう。かくして、ロマノス三世の即位当初に存在していた三つの政権内派閥のなかで、ゾエとパフラゴニア家のグループが他の二つを駆逐し、最終的な勝利を制したのである。

こうした状況の下で、政権内のロマノス帝の孤立化は誰の目にも明らかとなっていた。政権内から一切の対抗勢力を追い落とし、絶大な権勢を誇るに至ったゾエとパフラゴニア家の一派にとって、彼の存在はもはや目障りなものでしかなかった。一〇三四年四月十一日、老いた皇帝は、パフラゴニア家のミカエル配下の者たちによって浴場で溺死させられ、後者がミカエル四世として帝位に昇った。その際、この政変に対して反発の声がほとんどあがらなかったことに注意したい。この時点で既に人心は彼から去り、ロマノス帝は一人の無力な老人として死を迎えねばならなかったのである。

ここまで、我々は、ロマノス三世アルギュロスという一人のビザンツ皇帝の登位から失脚に至る過程を、彼の軍事行動への取り組みを軸に、政権内外での権力闘争の推移をも視野に収めつつ、考究してきた。そこで最後に、以上の議論を、皇帝権と軍事行動の相互関係という観点から整理し、そのうえで、このロマノス三世の時代が、前後の歴史的文脈のなかでいかなる位置を占めるのか考察して、本稿の結びに代えることとしたい。

皇帝にとって軍事行動がいかに政権強化のために重要であったかは、帝位に就くとすぐにロマノス三世が遠征の準備に取りかかったことからわかる。その際、遠征の目的がシリアに決定した背後には、潜在的ライヴァルであるコンスタンティノス・ドラッセノスに対するロマノス帝の対抗意識があったためと推測されるのは既に述べた。

ところが、予期に反して、この遠征に反対する動きは、政権外のドラッセノスら小アジア貴族グループではなく、むしろ

① Scylitzes, p. 376 f.
 ② *ibid.*, p. 377.
 ③ Kamer, *Emperors and Aristocrats*, p. 184.
 ④ Scylitzes, p. 377.

⑤ ティモテオス西方軍人や不満派貴族の仲介役は、前者の側近、プロトノタリオスのヨハネスが果たしたであろう。彼はかつて、コンスタンティヌス二世に重用され、ローマン三世の即位後、皇帝からシチリアルロクに叙せられ、ティモテオスの審議の任務を与えられた。
ibid., p. 375 f.

⑥ Michael Psellus, I, p. 36. 以下、皇帝の遠征計画を軍幹部たちが思案する場面を記したところを報告している。

⑦ cf. Kamer, *Emperors and Aristocrats*, p. 186 f.

⑧ この時期のイメネイオスとビザンツ勢力と帝国との関係については、ヤン・ワグネル W. Felix, *Byzanz und die islamische Welt im früheren 11. Jahrhundert*, Wien, 1981, S. 79-91. を参照。

⑨ Michael Psellus, I, p. 35 f.

⑩ *ibid.*, I, p. 36.

⑪ Scylitzes, p. 395 f.

⑫ *ibid.*, p. 379; Michael Psellus, I, p. 36.

⑬ *ibid.*, I, p. 36.

⑭ A. P. Kazhdan & A. W. Epstein, *Change in Byzantine Culture in the Eleventh and Twelfth Centuries*, Berkeley-Los Angeles, 1985, p. 64.

⑮ この出来事のおよそ一三〇年後、場所も同じアンティオキアで、我々は似たような光景と遭遇する。一一五九年、ビザンツ皇帝マヌエル一世コムネノス(在位一一四三—一一八〇)の同市入城の際、アンティオキア公ルノーは九腕の皇帝の乗馬の轡を取り、騎乗のイェルサレム

王ホーティマン三世も皇帝のすぐと後を、しかも王の徽章をまきして行進した。Ioannes Cinnamos, *Epitome rerum ab Ioanne et Alexio [sic: Manuele] Comnenis gestarum*, ed. A. Meineke, Bonn, 1836, p. 187 f.

この二つの出来事を隔てる時間や、種々の前提条件の相違にもかかわらず、この儀礼的行為に込められた政治的意味の共通性は明らかである。

⑯ 以下、シリヤにさがる作戦行動の推移についての記述は、主として Scylitzes, p. 379 f. 24-25, Felix, *Byzanz und islamische Welt*, S. 85-88. を参照。

⑰ *The Chronicle of Matthew of Edessa*, Translated from the Original Armenian, with a Commentary and Introduction by A. E. Dostourian, Rutgers University, ph. D. thesis, 1972, p. 67.

⑱ ヲン・メネイオスの原文は未訳。Felix, *Byzanz und islamische Welt*, S. 86, Ann. 132. 24-28.

⑲ Kazhdan, *Change in Byzantine Culture*, p. 64.

⑳ カジハズン説の難点は、既に自身がアンティオキアのドゥカスに在任した際のあのコンスタンティヌス・ドラッセノスが、なぜ「ドゥカスの息子」と呼ばれねばならぬのか、という点である。むしろ「ドゥカス」を問題とするならば、現ドゥカスのコンスタンティヌス・カラントノスを想定するべきかもしれない。この点で、彼がこの遠征の直後にアンティオキアのドゥカス職を解任されたこと(Scylitzes, p. 382.)は暗示的であろう。とはいえ、カラントノス家の成員のニャフキロスがこの少し後にナウプリオンのストラテegosとして活躍しているのが知られているので、同家がロマノス帝の寵を全く失なっていたわけでもないらしい。

発想を変えて「ドゥカス(ないしドゥカス)」を姓と考えると、別

㉑ *ibid.*, p. 385.

㉒ *ibid.*, p. 385.

㉓ Michael Psellus, I, pp. 44-49.

㉔ Scylitzes, p. 388.

㉕ Michael Psellus, I, p. 47, 49. 以下の記述は拠る。

㉖ Scylitzes, p. 390 f.

㉗ 唯一、かつてローノス帝のライヴァルだったコンスタンティヌス・ドラッセノスだけが、ミカエル四世の登位に批判的態度を示した(Scylitzes, p. 393)。ただしそれは、無惨な最期を遂げた老皇帝への同情の念から、というより、次期皇帝に自分が選ばれなかった不満から表明されたものと解すべきであろう。

五 結びにかえて

る皇帝の独裁権力の強化を危惧した政権内部の勢力から発生した。すなわち、一回めの遠征の際には、軍の最高幹部としての自己の地位が脅かされていると感じたコンスタンティノス・ディオゲネスによって、次いで、二度めの遠征時には（ディオゲネスのイリュリアへの逃亡騒ぎが事実無根と仮定するならば）権力奪取を狙うパフラゴニア家の一派によって、それは企てられたのである。この点で、皇帝の目算は外れた、と言えるのかもしれない。皇帝権強化のために、皇帝は軍隊を直率し、軍事的名声を得ることを熱望したが、肝心の政権構成員はそれを望んではいなかったのだ。

換言すれば、ロマノス帝はかつてのバシレイオス二世のような強力な専制者となることを目指したのに対し、彼の政権の有力構成員たちは皇帝を、自分たちの利害を代弁する「仲間うちの第一人者」の座に留めておこうとした、とも言えるだろう。井上浩一氏が指摘した、これら二つの皇帝理念の緊張関係は、ロマノス三世の政権にも内包されていたのである。ただ、この問題で難しい点は、もしも皇帝が政権構成員の言いなりに振舞ったとしても、必ずしもそれが政権の安定にプラスに作用するとはかぎらないことだ。彼が、政権内の有力者に強い統率力を発揮できぬ場合、後者相互の利害対立を収拾しえず、混乱のなかで政権は崩壊してしまうだろう。それゆえ、皇帝には、政権構成員の歛心を種々の恩恵で贖うだけでなく、時には彼らの反対を押し切っても、自らの意志を貫きうるだけのリーダーシップが必要であった。結果として、彼が大事業を成し遂げたならば、政権内の彼の地位は不動のものとなるだろう。その点で、ロマノス帝にとってのシリア遠征は、自己の権威を盤石なものとするための重大なステップだったのである。

これに関連して、二度とも皇帝のシリア遠征の出身を挫くかたちで発生した、コンスタンティノス・ディオゲネスをめぐる陰謀騒ぎと、皇帝のシリア遠征の夢が最終的に潰え去った後に発生したいわゆるバシレイオス・スクレロスの陰謀事件を比べてみると、そこでの皇帝の存在感に格段の差異が生じていることは注目すべきだろう。すなわち、一連のディオゲネスの陰謀が皇帝への権力のさらなる集中を阻むことを目指したものと解釈しうるのに対し、いわゆるスクレロスの陰謀事件で問題となっているのは、先にも見たとおり、スクレロス・ブルケリア夫妻とゾエ・パフラゴニア家の間の権力闘争であり、そこにおいて皇帝は何ら主導的な役割を演じてはいないのである。こうした落差を、単に、遠征失敗後のロマノス帝の落胆や無気力さに帰すだけでは、事態を完全に理解したことにはなるまい。軍事遠征に賭けたロマノス帝の熱意を見れば、それが彼の統治プランのなかでいかに中心的な位置を占めたかは容易に推察されよう。それだけに、この賭けに失敗したとき、彼の権威の失墜は避けられぬこととなった。そうした視角から見ると、彼の失脚と酷たらしい死は、その必然的な結末だった、と言ええるのかもしれない。

では、ビザンツ史上の文脈のなかにロマノス三世の行動を位置付けるとすれば、いかなることが言えるのだろうか。彼が自らの軍事行動を重視した理由として、本稿で指摘したライヴァルのダラッセノスへの対抗心だけでなく、彼以前の武人皇帝たち（ニケフォロス二世、ヨハネス一世、バシレイオス二世）の影響があったことは想像に難くない。歴戦の勇者として帝位に昇ったニケフォロス二世フォカスの下で「武人皇帝」の伝統が久しぶりに復活し、バシレイオス二世の下でそれはマケドニア朝正嫡帝の身にも及ぶこととなった。②ロマノス三世は、こうした偉大な先達たちの範に倣おうとしたのだ。

だがロマノス三世の治世には、既に深刻な軍事的危機の時代は遠ざかっていた。前代の皇帝たちの尽力により、国境は視界の外へ退き、恒常的な緊張感とは無縁の世界が現出していた。それゆえこの時期のビザンツ帝国の軍事行動には、かつてのような、国家の存亡を賭けた必死の形相は消え、むしろそれは、国威発揚を目的とした敵地への侵攻を特徴とするようになる。そうした軍事行動は、ロマノス三世のシリア遠征に典型的に見てとれるように、単発的な大規模遠征という形態をとった。そこで意図されたのは、華々しい戦勝による、国際社会でのビザンツの地位向上と、国内における皇帝の権力基盤の強化だった。かくして、この時期にビザンツが遂行した戦争は、ただその勢威を内外に示すことだけを目的とした、「儀礼としての戦争」の様相を呈することになる。ビザンツ皇帝はそこで、武人としての自己を演じたのだ。こうした傾向はひとりロマノス三世に限られたものではなく、彼に続く皇帝たちにも引き継がれたように思われる（たとえば、

一度も戦場に出たことがなかったにもかかわらず、軍装姿の自らの肖像を貨幣に刻ませたコンスタンティノス九世モノマコス帝(在位一〇四二—一〇五五)の例を想起されたい。^③

他方、政権の構成員の特徴について見るならば、ロマノス三世治下のそれは、皇帝と同盟関係にある門閥貴族層と、前政権から引き継いだ宦官層に大別されることが確認される。パシレイオス二世の治世を画期として門閥貴族家門の顔ぶれはほぼ一新されたが、縁戚関係にある有力貴族家門を政権の支柱として利用する方策自体は、既に十世紀のロマノス一世レカペノスやニケフォロス二世フォークラスといった貴族出身の皇帝によって用いられていた。それゆえ、ロマノス三世帝の政権は、それらと、宦官を重用したコンスタンティノス八世の方式との折衷的な体裁をとったと言いうことができるかもしれない。このことは、一方でマケドニア朝の後継者として帝位に昇ったが、自ら名門貴族の一員でもあった同帝の二面性を暗示しているようにも思われる。

縁戚関係にある門閥貴族と側近の宦官を併用する手法は、ロマノス三世以降の十一世紀の歴代皇帝政権にも継承されている。^④ 皇帝はこれら二つの勢力を巧みに競合させ、両者の均衡の上に自己の絶対的権力を築きあげようとしたのであろう。あるいはそれは、巨大な中央国家機構を背後にもつ高級官僚層と、興隆途上の新興門閥貴族層の妥協の産物としての側面を有していたとも解釈でき、その点で、時代の推移と共に前者から後者へと権力の重心が移っていく過程での過渡的形態と捉えることも可能であろう。

だが、利害を異にする人々を内包した政権は、常に激しい内部対立を生む危険性を秘めていた。ロマノス三世以降の諸帝は、政権内に複雑な構成員を抱え込みながら、かつての専制者としての皇帝という幻影にひきずられて、悪戦苦闘を繰り返すこととなる。十一世紀のビザンツ政治史を特徴付ける、皇帝の相次ぐ廃立と恒常的な政治不安の要因のひとつは、このあたりにもあったのではなからうか。それが最終的に解決されるのが、属州門閥貴族の利害に全面的に基付きつつ、皇帝自身が優れた軍人として強い指導力を発揮しえたコムネノス朝の政治体制の下においてであったのは、本稿の議論に

照らしてみるならば、首肯しうるところであろう。^⑤

① 井上浩「コムネノス朝の成立——十一世紀ビザンツ帝国の政治体

制——」、『史林』五七巻三頁、一九七四年、七〇—一〇一頁。

② マケドニア朝期ビザンツの権力構造、および皇帝権のあり方に関しては、筆者は別稿で検討を加える予定である。

③ cf. P. Grierson, *Byzantine Coins*, London-Berkeley-Los Angeles, 1982, Plate 51, no. 915; L.-M. Hans, "Der Kaiser mit dem Schwert—Zu einigen byzantinischen Münzbildern des 11. Jahrhunderts", *Jahrbuch für Numismatik und Geldgeschichte*, 33, 1983,

S. 57-66 mit einer Tafel.

④ Kamer, *Emperors and Aristocrats*, pp. 190-297.

⑤ コムネノス朝成立に至る政治過程については、註①の井上氏の論文に加え、拙稿「ビザンツ貴族と皇帝政権——コムネノス朝安定化への過程——」、『史林』七一巻三頁、一九八八年、一四〇頁、そして同王朝の政治体制の特質については、同じく拙稿「アレクシオス一世とビザンツ軍事貴族——コムネノス朝支配体制の組織原理——」、『西洋史学』一一一頁、一九八九年、一—十七頁を参照。

(富山大学人文学部講師 富山市長江四七—三 合同長江宿舍二—三二号)